自白

島さち子

自

白

装画　島　さち子

自　白

「実は……僕の大伯父は、銀行強盗だったんだ！」

真岡哲は声を低め、とても大切なものを取り出して見せるように言った。

「きみのようなお嬢様には、とても、想像出来ないだろうけど……。薄暗い骨董屋の奥に、何時も紬の甚平を着て坐り、むずかしい本を読んでいて、客に声を掛けられると、動物のような人間慣れしていない目をあげる。元銀行強盗の蒼白い横顔、僕はその光景を見て育ってきたんだ。それは、懐かしさとも、愛とも……。僕はその血縁であることを、ひそかに誇りに思ってきたんだ！」

「本当？　超、越えてる！　羨ましいわ！　わたしの消毒臭い藪医者の一族には、そんなロマンなど、何処を探しても、とても取り出せそうにない」

哲は、わたしの羨望をかわし、カナダ留学の旅立ちに、そぐわない風変わりな話題と、
「話には続きがあるんだよ、乞うご期待！」
予告まで残して、おおげさな別れの手を振りながら、成田から飛立って行った。
いっそ、駆け落ちしてもよかったのに。本来なら二人で飛立つ筈だったのだ。わたしが家族の同意にこだわったから……。
わたしは独りぼっちの午後の、不安な時間を過すあてもなくて、祖父の家に足を向けた。この家も何年ぶりになるだろう？
大通りから入るとアジア系の文字がやたらに多くなり祖父の家の奥にはアジア民族自治街とかいう横看板があって、それらしいアジア系の人たちが出入りしていた。祖父の家はその手前に、いわゆる石塀に見越しの松を覗かせた日本家屋で、二間幅の門は何時も締め切られ、開いているのを見たことがなかった。石垣から櫻が深緑になった葉を道路まで広げて、八月も終わりの、まだぎらぎらと輝く太陽を遮って、優しい葉陰をつくっていた。
郵便配達夫が門の前にいて、表札を眺めて戸惑っている。
「瀬波桂馬さんのお宅ですか？　参ったなあ、この表札では、まるで読めやしない？」
表札は字画が多い上に、変に崩してあるから読み取れないのだ。

インターホンを押すと、杉子の声が返って来た。
「理子です。郵便屋さんが、お祖父様あてに、配達証明付きの郵便ですって！」
門の脇の潜り戸を入ると、杉子が慌しく奥に入っていき、代って出て来た桂馬が、不当な脅迫に立ち向かうように、姿勢を伸ばして嵩をまし、印鑑をついてから、震える手で郵便物を受け取った。
「ここの表札何とかなりませんかあ？　これでは何だかわかりませんよ。全く、判らないために出しておくようなもんじゃありませんか！」
若い配達夫が、腹に据えかねたらしく大声をだした。
「ここに五十年も住んでおるが、これが読めんのはお前が始めてだな！　どんな字を書こうと貴様ごときの指図は受けんわ！　とっとと、出て行け！」
桂馬が腕を振り上げて配達夫を追い立て、ついには、裸足で追いかける。
「公務妨害ですよ！　この爺！」
配達夫は逃げながら悪態をついた。
わたしは小さい時から。蛇がとぐろを巻いているようだと思って来たので、二人の会話が可笑しくて思わず笑い声をあげた。桂馬はわたしの存在に始めて気が付いたのか、我に返ったように、理子を見て頭をかいた。

「安心したわ。お祖父様ったら、あんな若い人を追っかけていくほど、お元気なんですもの。寝込んでいらっしゃるんじゃないかって心配してたんですよ。さすが、理子のお祖父さまは筋金入りですね！これなら、お父様もお母様も安心なさるわ」

杉子が子供の世話でもするようにお湯を入れた洗桶で桂馬の足を洗い、自分の膝の上にのせ、タオルで足の指の一本一本まで丁寧に拭っていた。昔からずーと見慣れてきた光景だったが、単なる主従関係とも見えない何かが、そこにはあるような気がした。

「お祖父さま、さっきの配達証明付きの郵便、あれ、何あに？　なんか、いいお知らせだといいですね！」

わたしが気分転換を試みると、杉子が咎めるようにわたしを見て、手をしきりに横に振っている。触れないで欲しいと言っているらしい。当惑してしまう、そこまで神経質になることもないじゃん。老人だからって……、使用人だから気を使い過ぎるんだよ。

「お祖父さま、それ、楽しいお手紙ではないんですか？」

「なーに、手紙を出している方は楽しんでいるんだろうが……」

「受け取る方は、それほど楽しくないってわけ？」

祖父の桂馬は痩せるだけ痩せ、頭には真っ白な髪が雲のように浮かんでいた。大きな耳、微笑んで

も渋面にしかならない白い髭のなかの微笑。桂馬は大きく首を横にふった。
「この手紙はな、想像で書かれてはいるようだが、真実を突いていることは、認めねばなるまいて！」
桂馬の手にある白い封筒は、まだ封が切られていない。わたしは沈黙を挟んで、祖父と向かい合っている。
「どうなさったの？　お祖父さま、なにかひどいことが書いてあるの？　見ないでもわかるっていうことは？」
「以前にも、配達されているんですよ。その人、気違い婆なんですよ！」
杉子は桂馬をうながすように、自分の肩を彼の脇の下に入れて寄り添った。
「嫌な人、せっかく面白くなっていたのに！」
わたしは杉子に向かって、肩をすくめる。
桂馬は横浜に医院を開業し病院に発展させ、今では総合病院として地域医療を担う中枢病院となっている。彼の息子である理子の父親、瀬波晴朗に病院長を譲り、顧問として、今では月一回ほど、顔をだすだけだ。その回数も徐々に減ってきている。
祖父はわたしの家族の住む横浜から、離れた川崎でお手伝いの杉子と隠居生活を送っているのだ。何故、このごたごたした川崎にこだわるのか、わたしにはわかっていない。

何十年か医師をしてきたのだから、桂馬も患者の死にかかわる恨みを買っているに違いないのだ。常に最善を尽してきた、年老いてから、診察する危険は避けたいと、六十五歳で引退し、それから二十年、時は流れてはいたが……。

「お祖父様は医師だもの、どんな犯罪も正当化されるみたいな職業だから、罪を罪とも思わずに来て、今頃になって、執念深い女に食いつかれて困っていらっしゃるんでしょう！」

わたしは軽薄な話し方で、医師だった老人の傷ついて自嘲的になっているのかもしれない心を逆撫でしてしまう。

でもこれくらいのことで怒ることなどなかった桂馬なのに、白い封書は開封されることもなく、彼の手で二つに千切られていた。

凄いわ、そうまでしなくても？　わたしは自分が祖父の手で真っ二つに切断されたような思いになる。

「その手紙の中に、よほどひどいことが書かれているんですか？」

わたしは杉子に顔を寄せて聞いて見る。

「わたしは存じませんよ。一度も読んだことがないんですもの……」

杉子は桂馬を窺って声をひそめる。

「お祖父さま、隠さないで！　何者からの手紙なんです？　そんな婆あなんか、理子がやっつけてあげるから、おっしゃってよ！」
「誰かしらん？」
「知らないんですか？　本当に？　そんなの、訴える事だって出来るんだから、お祖父さま一人で、悩むことないのに……」
「誰か知らん！」
「昔の、患者かなんかでしょう？」
「違うと思うね。五十年も前のことだからな……」
いずれにしろわたしが祖父と話すということは、タイム、トラベルをするようなもの。五十年前となると、祖父が病院の基礎を築いた頃の話。彼は何を隠しているのかな？
桂馬はわたしの見ている前で、裂いた封書に火をつけた。
火は燃えついたと見せてくすぶっている。わたしは灰皿からそれをとって、空気をいれるように一枚ずつはがしてから、改めて火をつけた。海浜銀行の四文字が読み取れた。
祖父は手紙が燃え尽きるまで自分の眼で確めてから、指先で灰を崩した。
わたしの手の中には、封筒の半分、差出人の住所が握られている。

「これで、お祖父さまの、悩みも、綺麗さっぱり退散ね！」
「そんな簡単なことではないわ。この女も、たいした人物さ！」
さっきまで確かに桂馬の手は小刻みに震えていたのに、今、話題にされても、満更でもない顔をして余裕さえ見せ、相手を褒め上げているのだ。わたしはその落差にとまどっていた。
桂馬の眼がわたしの眼を捕らえた、何かを言いたがっている、それが何なのか？
「お祖父さま、昔みたいにお話してよ！　ほら、小さい頃……」
話し掛けているわたしの前に、杉子がぐいと体を食い込ませ、桂馬を追い立てるように庭に導いて行く。
「なあに、ひどいわ！　これが、使用人の態度かしら？」
わたしはのろのろと立ち上がり、畳に坐っていて飛び出した、パンツの膝を叩いて形を整える。
海浜銀行、海浜銀行、口のなかで繰返してみる。わたしのお祖父さまに限って、……まさか、そんなこと、あるわけないじゃないの。
でも、桂馬の本当の顔は？　秋風に揺れる裸木に、真っ白な髪と髭で囲われた顔には、彫刻刃のノミのあとのような三センチ程の頬の傷を隠していた。子供の頃、よくその傷あとに触れようとして怒られたものだけど、あの怒り方は異常だったわ。

五十年前、一九四七年……太平洋戦争直後……？

二階にあがり、窓にもたれながら、しっかりと握り締めていた右手を開いた。千切られた封筒の皺を徐々に伸ばしていく。差出人の名前、土方洋子、女の名前。これが手掛りになるだろうか？　住所も何とか読み取れた。何なのかわからないけど、何かがはっきりすれば、わたしが祖父にしてあげられることが分かって来るかもしれない。

二階から見下ろすと、桂馬と杉子が庭の櫻の下をそぞろ歩きしていた。健康の為の日課なのだろうか？　それにしても唐突すぎる。杉子の白足袋が驚くほど白く大きく見えた。日本舞踊をやっていたからだろうか、重心を下に置く歩き方で。確か、わたしの母と同い年だと聞いたことがあった。杉子は桂馬の秘密に立ち入っているのだろうか？　彼女は故意にわたしが桂馬と、このことで接触するのを拒否したのかもしれない。

わたしはもう一度、差出人の名を見詰め直した。

「土方洋子！」

大田区霞町３丁目、何をしようというのか？　わたしは、はっきりとした目的も掴めないまま、気づいたときには、もう、独りで駅前通りを歩いていた。スパーストアから入った路地の突き当り、広い庭に囲まれた古びた平屋が土方洋子の家だ。

スーパーストアの広いガラス戸越しに、それとなく土方家に注意を向けながら、ぶらぶら品物を物色している振りをしていた。万引きを警戒しているらしい男が、わたしのショルダーバッグに胡散臭い目を向ける。

夕方四時過ぎ、洋子らしい老年の女が髪をひっつめにしながら、ショッピングバッグを抱えて出てきた。背筋を伸ばした均整のとれた身体、何歳くらいなのかわからないが、充分に活力を感じさせる。わたしは彼女に声を掛けていた。

「お尋ねしますけど、月曜社は、この辺りではありませんでしょうか？」

女はわたしの前で足を止めた。

「ああ、知っていますよ。今、わたし、向こうに参りますから、ご一緒しましょうか」

気さくで人懐っこい感じの女だ。何となくこっちも無防備になる。

「あら、嬉しい、わたし方向音痴なんです」

「そうですか？　わたしもですよ。大体反対の方向に歩いて行くんですよ。あら、あなたも、それは奇遇ですわね。もしかして、あなた、漫画をお書きになる方？」
「いいえ」
わたしは慌てて否定する。これが土方洋子なのだろうか？　犯罪ものの漫画を出版している出版社が、この近くにあったのを思い出したのだ。
「あそこでは、近いうちに海浜銀行事件を漫画化して売り出すなんて言っているんですよ。ちゃかすのもいい加減にしてって、わたし、抗議しているところなんですよ」
「海浜銀行事件？」
やはり犯罪？　それが祖父とどんなかかわりがあるの？　まさか、この女、土方洋子がわたしの正体を見抜いたのでは？
「ええ、海浜銀行事件のことでしたら、わたし、無実の死刑囚、天道亮太さんと文通をしておりますのよ。天道と申しても、お若いかたは御存知ないかもしれませんね」
わたしはこちらから、話を切り出さないですんだことで、なにかほっとして、彼女の顔ばかり見詰めていた。
誠実味を感じさせる目尻の綺麗な放射状の細い皺。頬のつややかさ、顎の線の僅かなたるみ、五十

五歳から六十歳くらい。それとも、もっと？
「あの、わたし、そういう事件について調べたいと思っているんです。そう、海浜銀行事件の論文を書きたいと……。月曜社なら、犯罪に詳しい方がおいでではないかと、来てみたんです！」
「あら、嫌だ、その事件でしたら、私が日本中で一番詳しいんですよ。なにしろ真犯人をしっていますもの」
土方洋子はいうと獲物を捉えでもしたように、嬉々として方向転換する。
「なら、わたしの家にまいりましょう！　色々お教えしてさしあげられると思いますのよ。嬉しいわ、こんな、お若い方に関心を持って頂いて、感激ですこと！」
「偶然ですね」
わたしは小さな声で言った。
「犯人は毒薬に通じていたのに、天道さんは、書道家で毒薬のどの字も御存知ではないんですよ。ただモンタージュ写真とお顔が似ているとか何とか言われて、逮捕され、そのままでしたのよ。私だって責めたてられれば自白したくなりますもの。ねえ、あなたも、そう、わたし達気があいますのね。証拠は何一つありませんのよ。あの方も少々よからぬことをしていらしたから、つけ込まれることになったんですけど。当時は法律を守っていては餓え死にするような時代でしたからね。戦後の混乱期

でしたから。あら、嫌だ、行き過ぎちゃった。すぐ、これですの。もっと、私の話お聴き下さいますか？　私、若い方にお話して差し上げたくって……」

土方洋子はショッピング、バッグをわたしに持たせた。男物の下着や、ちょっと贅沢そうな食料品が入っていた。

「実はね、あの方に面会にいくので、これ、差し入れの品物なんですの。そろそろ寒くなりますものね、もうちょっと買い増しをしようとおもって……」

その死刑囚と祖父はどういう関係になるのか？　この女はあの方と、その死刑囚を呼んだ。

「九十歳にもなれば、あの方、老衰で何時ぽっぷり行ってしまうか、わからないんですよ。あなたも一度無実に泣く天道に会って御覧になることですわ。もしも、あなたみたいにお若い女性に会えたら、あの方もどんなにお喜びでしょう。そのくらいの喜びは与えて下さいませんか。本当に無実なんですもの。無実と思われていますから、とにかく、ここまで生き延びてこれたんですのよ！」

祖父の孫であるわたしにとって、彼女の言葉は針千本だ。いちいち皮肉に聞こえ、責め立てられる気分になる。

土方洋子は自分の家に戻ると、郵便受に手を突っ込んだ。

「今日も返事が来ていません。毎日待っているんですよ。真犯人からの返事を！」

言いながら彼女は、わたしを応接間に招き入れた。罠なのかもしれない？　でもここで逃げをうっては返って疑われてしまう。

「私、真犯人が誰か、わかっていますのよ」

洋子がいい、奇妙な静寂がくる。わたしの動悸が大きくなる。

「本当ですか？　でも確か、時効になってるんじゃなかったかしら！」

「とうに時効になっていますよ、ですから、何を言ったとしても雑音にしかならない。でも、その雑音が大切なんですのよ。あの方を今まで生かしつづけてきたのは、その雑音ですものね。無実かも知れない、無実だ、無実らしい。それだけの雑音を立てるのに、どんな努力をしてきたかしれませんのよ。私は独りで、調査を始めましたの。どんなうわさでも取りついていって、遂に真犯人に到達しました！」

何でもぺらぺら話してしまう女なんだわ。誰でも簡単に信用してしまう、お人好しなのかもしれない。

「じゃあ、わたしに真犯人の名前を教えて下さい！」

わたしはメモをとるためのボールペンとノートをとりだした。まさか、それが祖父であるはずはないのだから、平気よ！

「はじめは、真犯人の、その頃の愛人の妹さんから、人相書きとそっくりの人がいると聞きましたの。それで、私は真犯人の離婚した前夫人を探しあてました。それで、ここ半年間、私は配達証明郵便を送りつづけていますのよ。ああ、あれをお見せしましょうか」

わたしは思わず目を閉じた。祖父だと言っているのだ。

洋子は隣室の座敷に入ると、違い棚の蒔絵の箱から、一通一通の手紙に配達証明の葉書や、料金の受け取りがクリップで止めてあるものを取り出してきて、わたしの目の前で、ひらひらさせて見せた。

お祖父さまはこんな疑いを受けて、何故訴えないの？　事実でないなら名誉毀損で訴えたらいいのに……。でなければ馬鹿なことをするなと、変なまねはよせと、はっきり言うべきだわ。

「御覧になりますか？」

「ええ」

わたしは叫び出したい気持ちを必死でこらえていた。

「あら、嫌だ、私ったら、お若い方が事件に興味を持って下さるってことで、すっかり有頂天になってしまいましたわ。ごめんなさい。あなたも、びっくりなさって、どうしたらいいかわからないってお顔していらっしゃるのに！」

いま、わたしを駆り立てている衝動にまかせて、この手紙を読み切らなければ、永久に読む機会を

失ってしまう。チャンスよ！

部屋の隅にいた猫が鋭い目をあげて立ち上がった。

誰に盗み見されるわけでもないのに、わたしは胸と両腕でバリケードを作って手紙を読み始める。

瀬波桂馬先生様

残暑の候、瀬波桂馬先生におかれましては、御壮健にて御活躍とのこと、心よりお喜び申し上げます。

さて、昭和二十二年十月、戦後の虚脱状態にありました日本人を震撼させた、海浜銀行殺人強盗事件の惨たらしさは未だに記憶に生々しいものがあります。

あれから五十年余の歳月が流れ去りました。感概無量のものがあります。国民は富み、人類は宇宙に達しました。

この間、死刑囚として獄中にあって、三度の自殺未遂を繰り返しながらも、いまだに無実を叫び続けている天道亮太氏の無念さ、口惜しさは如何ばかりかと推察いたしております。老齢の身にて、最近心身共、極度に衰弱されていると聞き及んでおります。

瀬波桂馬先生！　私は良心に従い、堅い信念を持って申し上げます。今からでも遅くはありません。

どうか、犯行を自白して下さい！

たとえ、今、自白されましても、先生はもはや何の刑罰を受けられることもないのでございます。聴衆もまた、偉人を受け入れるように、単なる史実として受け止め、その勇気を称えるでしょう。歴史は殺人者で満杯でございます。一生逃げ隠れして死するより、歴史に名を残すことを選択されるよう真に期待するものであります。先生におかれましては臆することなく犯行を自白され、勝利宣言をなさってください。

私はそれによって、天道氏の無実が確定し、残り少ないこれからの日々を安らかに過ごせるようにと、それのみ願っているものでございます。

瀬波桂馬先生は午後三時過ぎ海浜銀行に赴かれ、行員十九名を集め、ＧＨＱの命令だといって、赤痢の予防薬と称して毒薬を飲ませて、十五人を毒殺し、四人が生き残りました。この事実を隠蔽し、他人に罪をきせたままで、一生が終わっても平気でいらっしゃれるのでしょうか。もはや、心の痛む人間らしさの欠けらさえも、お持ち合わせではないのでしょうか。人間らしく罪を多少ともお感じでしたら、天道亮太氏の無実の証明をしてほしい。それの出来るのは、瀬波桂馬先生をおいてないのでございます。

私は次の七点をもって、先生が海浜銀行事件の真犯人であると確信致しております。

その１

人相、体型、が酷似している。事件発生時、犯人は年齢三十五歳―四十歳位、身長百七十糎位、中肉、面長、鼻高、色蒼白、一見柔和、大きな耳、左頬にしみ、左耳下顎に長さ三センチ位の傷痕。

天道氏は当時四十歳、身長百五十七糎、それに対して瀬波先生は、身長百七十糎、三十五歳、親しい人の証言によると、左頬に傷痕がある。これは証人の見ていた位置によって、見えていた人と、いない人があった筈で、他の証拠に比べて重要性をもっている。耳が大きい。モンタージュ写真に酷似している。

その２

瀬波先生には、いかなるアリバイも成立しない。医院の看護師、自宅の前夫人、愛人の大江桃子さんの妹に聴取した結果であります。

その３

瀬波先生の愛人であった大江桃子さんは、事件の三日後に急死している。死因は心臓病とあるが、診断書は瀬波先生が作成したもので、彼女は自分が死んだら。それは彼、瀬波先生によって殺害されたものだと、前日妹さんに言い残している。

その４

投薬または注射により、保健所に収容された野犬や野猫を使って、動物実験を繰返していた。

その５

瀬波先生は事件発生当時、横浜に将来の病院敷地を確保するため、金を必要としていた。事件後購入、現在の瀬波病院の基礎をつくった。登記は取得三年後になされている。

その６

瀬波先生は当時医院を開業しながら、警察の嘱託医を兼務し、頻発していた伝染病情報を熟知しており、防疫班の腕章など手に入る立場にあった。

その７

瀬波先生は事件五年後、紺野ますえさんと、この事件が原因で離婚。離婚条件として、子供の将来のために、この事実を絶対に口外しないと約束させた。

以上により、私は瀬波桂馬先生を、海浜銀行事件の真犯人と信じて疑わないものであります。

先生にとっても快い年月ではございませんでしたでしょう。その手で十五人の命を奪い、四人に重軽症を負わせ。他の一人を獄中に送り、その家族を崩壊させた罪は決して許されるものではございません。

神様は先生と天道氏に長寿を許されました。それは、先生が悔い改めることへの神の意志でなくてなんでしょうか。私はこうした犯罪が二度と繰り返されないことを祈ると共に、瀬波先生が自己の利害にとらわれず、責任ある自供を示めされ、公判廷以来一貫して自己の無実を絶叫し続けている天道氏の無実を、公に立証されることを要求するものであります。

、

八月三十日　　土方　洋子

尚、この手紙はコピーし、一通は私方に保存し、一通は配達証明付き郵便にてご送付申し上げるものであります。

長い手紙だった。命がけの気迫がこもっている。これは何かの間違いだ、祖父のＳＯＳが聞こえて来る。助けてくれ！　助けてくれ！　肩からの震えで、メモをとろうとしても、文字は一字も形をなしていない。

お祖父様に限って！　祖父の身を思うならこのショックを洋子に隠し通さなければならない。思い切って目をあげた。

幸い洋子はいなかった、玄関の脇あたりで電話の応対をしている。戻ってきた。

「お読みになりましたか？　あら、深刻なお顔、どうなさったのかしら。もっとも気持ちのよいものではありませんわね。私だって、何も好き好んでこんなものを書いたわけではありませんのよ。なんとか無実の天道さんを獄中から出してあげたいだけなんです」

洋子は手紙を受け取るとそのまま座敷の蒔絵の小箱に戻した。わたしは自分を抱き締めている腕に力を込めた。言葉が出ない。

「主人も亡くなり、私は一人暮らしなんです。こんなことをするのは始め恐ろしゅうございましたよ。こちらの住所と本名をしっかり書いておいたんですもの。何時薬を盛られるかわからないと心配いたしました。覚悟の上ですけど……、私の父は法律家でしたから、こんなことが身についていますのね」

「それで、絶対の自信をお持ちなんですか？」

漸く声がでていた。

「なんだって、何時だって、絶対なんて言えませんわ。だから、私は反論の余地も、弁明の機会も、訴える自由も、先方に預けているつもりですの」

「ああ、違うなら違うと、おっしゃったらいいんですね」

祖父は早く反論したらいいのだ。わたしは漸く突破口を見つけたように陽気になる。

「違う！」

洋子の目が咎めるようにわたしを掴かまえた。
「調べられるだけ、調べてみたんですよ……。でもあの方にはもう時間がない。あと二週間待ってみて、返事がないようなら、突進してみるつもりなんです」
洋子は前に突き出した手を、外人のようにオオバーに宙に開く。
「突進？」
わたしは飛び上がった。その拍子に締め付けられるように苦しかった胸に漸く空気が戻った。
「これは、暫らくは誰にも内緒ですよ。よろしくって！」
洋子の小指がわたしの小指に絡み付いて強く振られていた。
「あなたの論文が出来上がったら、わたしが、パンフレットにして差し上げますよ。いろんな方に配りましょう。あなたに期待しますわ。あら、まだ、お聴きしていなかったわ、大學はどちら？　お名前は？」
「M大です。村田……広子」
とっさに友人の名前を口にしていた。
「広子さん！　そう」
わたしは後ろめたさを隠すように、ショルダーバッグをゆっくりと引き寄せていた。

「お祖父さま！　この間、お祖父さま、理子に何かお話あるって、おっしゃったわね」
わたしは子供の頃のように祖父に纏いついていく。
「そんなこと言ったかな？」
「嫌だあ、お忘れになったの？　何だか面白そうなお顔で、理子に秘密のお話があるって……」
「ああ、あれかあ。そうか、その為に来たのか？」
祖父は真面目に向き直り、杉子を遠ざけて言った。これが本当の殺人鬼かしら？
「この前、あの、お手紙をお祖父さま、焼いていらっしゃったけど、わたし、目を凝らして見てたんです。何か大きな事件に関係しているみたいでしたけど、お祖父さま、理子に助けて欲しいことあるんじゃないですか？　何だかそんな気がして？」
「ああ、僕も、もういいんじゃないかな、などと、思ったりしてね……」
「そうなの？　で、お祖父さま、本当に本当なんですか？」

「本当だろう」
祖父はさらりと言ってのけ、くったくなさそうに笑った。ものの重大さがわかっているのだろうか。この年になったら、さすがのお祖父さまだって、認知症がかって来て従来の瀬波桂馬ではありえないのかもしれない。
「だろうって？　どういうことか、理子にはわかんない？　はっきりして下さいよ。お祖父さまあ！」
「おいおい、おかしくなっているのは理子の方さ。しっかりして下さいよ！　理子さん！」
桂馬はわたしの狼狽ぶりを楽しんでいた。何かが吹っ切れたような蔭のない陽気さ。
「昔々、横浜で十五人を一瞬のうちに毒殺し、金を奪った強盗がいた。それがお祖父さまだと言っているのよ。解っていらっしゃるの？」
「欺いていたからね。客観的にいってあの婆、いい線いってると思うがね。僕も大胆な気持ちになって来たようだな。遅すぎた気もするが……」
「お祖父さま、本当に、手紙に書いてある通りだと認めるんですか？　後悔していらっしゃるの？　なら、自白して出たらいいわ。今からでも遅くはない！」
「お前、あれを読んだな！　何処で読んだ？」
桂馬の眼が炎のようにわたしを舐めた。わたしは簡単に説明困難に陥ってしまう。わたしは説明に

困ってもぐもぐ口を動かすだけにした。
「焼いている時見えたのかな？　いいさ、読んだからって悪いことはない。要するにあとは信用するか、しないかの問題だからね」
わたしには桂馬の態度が解せない。五十年も必死で隠蔽してきたものを、こんなに簡単に自白し、微笑しているのだ。今までの祖父にこんなに感じのいい微笑を見たことはなかった気がする。
「だったら、自白なさるの？」
「理子は素直だねえ、僕をそのまま受け止めてくれるんだ！」
「わかんない。でも、五十年考えた上で、お祖父さまはしたいようにすべきだと思うの。その為には、どんな協力も惜しまない！　今まで可愛がって戴いたんですもん」
桂馬は五十年間、自白の機会をじいと待って来たのだろうか。本当に？　わたしをからかって面白がっているのかもしれない。
「でも、あれは、土方洋子の想像の産物なんでしょう？」
「ちゃかすな、そうじゃない。あの婆はなかなかのものだ！」
「なら、お祖父さまは、自白したいわけ？　そこのところが、わたしには良くわからなくって……？」
桂馬の手がわたしの両肩におかれていた。八十五近い老人の手の甲には、蛇でも住んでいるように

静脈がとぐろをまいてうねっている。本当にこの手で毒薬をピペットでそそぎ分け、飲み方を実演し、十五人の人たちを毒殺し、四人に重軽傷を負わせたのか？　一瞬、奇術師のように毒薬の入ったコップが、わたしの胸に押し付けられてしまう、期待と恐れ。

桂馬は不器用に、わたしの手を握り締める。わたしは握らせたままにしていた。誕生日が来ると八十五歳になる。認知症が始まっているのではないのか。

「ここまで来れば、人生も、もう、残りいくばくもない。自分のしたことから逃げちゃいけない時が来ているんだ。今までも逃げていたというわけじゃない。あの事件にどう決着がつくか見守ってきたんだ。黙っていても、しびれてもいた。僕には逃げ延びる絶対の自信があった、独り喜びに浸っていたんだ！」

桂馬は、自分がやったと言っているのだろうか？　やったと仮定しているのか？　そのあたりが不明だけど、兎に角、自分の意志で何とかしようとしていた。

「そう、さすが、わたしのお祖父さまね！」

「本当のことを言っていい時がきたということだな。僕の人生の仕上げが必要なんだ。まさに瀬波桂馬の歴史の総仕上げだ。それには過去を取り戻さなければならない」

言って桂馬はからかうような大きな笑い声をあげた。

「僕は世間にこのことを公表する。大声で誇りを持って、海浜銀行事件の真犯人はこの私だと。しかし言ったところで、何も残らないことも考えられる」
桂馬は一寸息をついて口先を引き締めた。
「遠い昔になり過ぎたということだよ……」
「そんなことないって。この間もテレビでとりあげていたもの、掴まらない凶悪犯について……。あら、ご免なさい。でも、そう言っていたから……。それが、ご自分だったら、自慢なさりたくもなるのかもしれない？　まして、変りに捕らえられている人がいるんだもの。大いに意味はあります、あるわ。それに、その時話題になっていたけど、どんなに大勢殺しても、殺した一人一人の顔を覚えているものですってね、それ、ほんと？」
話が途切れた、聞いてはならない範囲に踏みこんだのかもしれない。わたしは桂馬の口元に瞳を凝らした。慎重そうに見える唇が内に入り込み、言葉を内なる悪魔に引き止められているみたい。
「あの銀行員達はな、ごく普通の何処にでもいる顔が揃っていた。だから、街角の何処にも亡霊は歩いていたよ。診察室に亡霊は列をなして現れ続けた。だから、いまさら、亡霊なんぞに脂汗を流して、自分が犯人だったなどと叫ぶ筈もないよ。理子には想像もできないことだろうが、わたしは軍医として召集され、地方の陸軍病院勤務となった。特殊部隊にいたBの担当医となり、彼から特殊部隊の実

態や、生体実験について聴取することができた。そのなかで、興味を引かれたのは、敵の要人の殺害をめざした毒物の生体反応についてだった。復員して医院を開業し、警察の嘱託医を兼任した。私はこの混乱期こそ飛躍の基礎をつくる好機ととらえていたんだ。焦ってもいた。漸く今の病院のガレージのあたりを買って小さな医院を開いた。しかしインフレの酷い時で、始め計画していた建設資金の十倍の金額を請求されたんだ。支払いは延び延びになっていたし、子孫の為にも、もっと拡張したかった。そんな時、地所や建物を差し押さえるとの通告を受けた。わたしはBのレポートにならって、動物実験を重ねてきた。その成果を試す機会が来たと理解したんだ。迷わなかった」

桂馬はそこで息をついだ。

「全員を殺せなかったのは、予期せぬ事態だったが、その手並みは天下を震撼させるに足る鮮やかさだった。お前は、それ以上、私に何が不足だと思うのかな？」

「それって、本当のことなの？　それでは、誇れることなんて何処にもないじゃない？　何処にあって？」

わたしは叫んでいた。本当だとしたら……。医師でありながら、人の命を何と考えているの、わたしは、いきどおりを込めて桂馬をみた。信じがたいほどの光を帯びてくる八十五歳の瞳。わたしは怪しんでいた。

「嘘でしょう！　ナイフ一本あれば今でも、才覚さえあれば何億、何千万の銀行強盗ができるのよ。可笑しいわ、その説明では殺しが目的だったのね！　その実験がしてみたかったのよ。それでは、ただの殺人鬼だわ」

「そうじゃない！　お前はそのお蔭で大きな病院のお嬢様として、ぬくぬく育って来たじゃないか！　パパだって、押しも押されぬ大病院の院長として、認められ敬われているんだ。総てあの時にその基礎はできた。誰に認められなくとも、おまえ達にはわかってもらいたい！　わかってもらわねばならない！」

「そういわれれば、そうなのかもしれないけど？　でも……、それが有り難いとは？　そんなことをしなくても、医師であれば、それなりの生活ができた筈よ。そんなことまでしなくても？」

「戦争によって、陸軍病院にあっても、特殊な任務を強要されたものにとって、未来は閉ざされていたんだ。混乱期だから、一時的に嘱託医の仕事はあった。しかし、何時責任を追究されるかわからない。国も安定してくれれば、そうはいかない。わたしには開業するしか選択肢はなかったんだよ。それだって何時何処に引っ張り出されないとも……。或いは世捨人のように山にでも篭る方が良かったのかも知れない。でも私はまだ若かった……」

桂馬は秘密任務のことを言っているのだろうか？　そうだからと言って、皆が同じような犯罪を起

したとは聞いていない。桂馬は自分を正当化しようと必死なのだ。
「事件とは関係なく、お祖父さまの愛人のかたも、毒殺されたとか？」
「待て！　少し待て！　お前は私を裁こうというのかね。既に五十年もたって、裁く権利を有する者はいないんだ！　重苦しい感情は霧散し、白々した昼だけがある。白昼であることが恐ろしいとでもいうのか？　私はもうすぐ八十五歳になる。この一瞬後、死んでも可笑しくないとなると、どこに殺された者と殺した者との差があるんだ。遅かれ早かれ人間は死ぬ。一個の生物としては、善も悪もないんだよ」
わたしは肩肘で体を支え、憤りが通り過ぎていくのを待っていた。
差がないですって？　おおありじゃないの。罪もなく殺された人は、その家族は、どうなるのよ！
不思議なことに思考はのろのろしていたが、この場に相応しい話題を口にしていた。
「カナダに留学したボーイフレンドの哲がね、わたしに大事なものを見せてでもくれるように、僕の伯父は銀行強盗だったんだよ、と話してくれたの。彼と結婚するとしたら、うまく、家庭的バランスがとれるというものかな？　でも、あいつの方は、多分つくり話よ！」
「お前は、恨めしげな抗議の表情をしているね。その友達と結婚したいのか？　で、その友達の名前はなんと言うんだ？　まさか？　真岡？　真の岡か？　それなら、お前の祖父の方が悪では、一枚上

だな！」

桂馬はからかうようにからからと笑った。開けっぴろげな、なんの心配も持っていない人間の笑いだ。

「じゃあ、どうするかな。そうだ、箇条書きにしなさい！」

桂馬は命令する。

わたしは開き直り、多くの矛盾に目をつむって、祖父の命の燃え尽きる前の、最期の揺らぎをじっと見つめる決心をする。風に煽られないように、わたしが祖父を護ってあげなければ……。

1　発表する日は、瀬波桂馬の満八十五歳の誕生日とする。

2　それまで、事件の詳細について、聞き正すことをしない。

3　以上について、互いに、何人にもこれを洩らさない。

4　発表する方法は、前々日、録音し、テープにとって、新聞三社に送付するものとする。発表は十月五日に指定する。

「まあ、それで好かろう。芝居がかるのも嫌いだが、プライドはあくまでも高くありたい。孫娘に

引かれて、無理矢理自白させられたという偏見だけは、排除したい」
「でも、お祖父さまが真犯人は自分だと、世間に発表した場合。土方洋子も、自分の配達証明郵便による勧告で、お祖父様が告白に踏み切ったのだと発表するわね。その口を閉ざすことは出来ないとしても……、彼女の保存しているコピーをマスコミに手渡すのだけは防ぎたいわ」
「手柄顔する女がいたのでは、世紀の自白もだいなしか？　なら、盗み出すかな」
「かなって？　わたしが？　まさか、お祖父さまには出来ないんだから！」
「なら、やるか？」
「嫌だ！　殺すってこと？　そんなに簡単に言わないでよ。お祖父さまったら！　真面目にお願いしますよ！」
神様、彼の頭に一発くらわして下さい。これでは何の反省もしていないのでは？　桂馬は真実を語るセレモニーにけちをつけられては、たまらないらしい。そういうことなら、わたしの力の全部で、桂馬の一生を偉大なものにしたい。
わたしは両手の間に、祖父の皺々の手を握っていた。握ると皺々が掌の中で、複雑なプリーツをつくる。
「お祖父さまが、あるがままのお祖父さまであることを、わたし、誇りにするわね！」

桂馬は和室で座椅子に坐ったまま、うたた寝を始める。八十五歳の老人特有のしみが、片頬をドット模様にしている。

独房では、これとよく似た九十歳の老人が、ずっと悲しげな鼾を立てて眠っているのだ。わたしの祖父の身代わり。法務大臣が新大臣になるたびに、又も死刑への秒読みが始まる。時が刻々減り続けていることだけは確かだ。

結局、老人にいいように仕切られてしまったのかもしれない。でもどんなに強がっていても、この五十年がどんなに心もとないものであったか、解る気がする、あの表札、この家がアジヤ系住区に面しているのは、彼の怯えにほかならないのだ。付き合っているのはアジア系だけ、すぐに、治外法権下の第三国に逃げ込めるように、用意してきたのに違いない。そんな一生は哀し過ぎる。

もう、病院の顧問も引退した。これによって病院の受ける打撃はどのようなものなのか、わたしにも推定はできない。もしかしたら、彼の口を封じて来たのはわたしも含めた家族そのものだったのかもしれないのだから……。

夏休みあけのキャンパスは、木々が驚くほど天に向かって枝を伸ばし、緑も濃くなって、相対的に学生たちが小さくなったような錯覚を抱かせる。

並木の贋アカシアは黄色い小さな花を例年のように、歩道一杯に敷き詰める。わたしは階段教室に入ると、最後列にいる村田広子の、一つ置いた隣りに席を取った。彼女は講義のテープをとりながら、前方にいるご執心の誰かに注意を向けていて、親友のわたしに気ずこうともしない。彼女の定期入れは、何時ものようにバッグに紐で括りつけてある。講義の終わる頃には、村田広子の学生証はわたしのバッグに滑り込んでいた。もう、悪戯したではすまない。これで親友を完全に失うことになる。

一晩がかりで、苦心の末、わたしの村田広子の学生証を作りあげた。他人を尋ねる時には強盗になったつもりで入っていき、何時でも殺人犯に豹変できるくらいの機転のきかせかたで……。桂馬から得たものは、偉大すぎる誇りと、そういう種類の人生訓かもしれない。

チャイムを押しても、土方洋子はなかなか出て来ない。

「あら、大學にお電話を入れて、あなたを呼び出して貰っていたところなのに……。お声だけでなくて、丸ごと出現したってわけ。なんと便利すぎて気のきかない時代なんでしょう」

洋子はさもおかしそうに声をあげた。

「いけなかったでしょうか？」
わたしは強盗ほどの度胸で訪れたのに、控えめに出る。
「急に確めてみたくなったんですよ。本当に、あなたが、M大生で村田広子さんかどうか……？」
見抜かれたのかもしれない。喉がつかえて小刻みに震える。
「あら、わたしは、小母さまの呼び出しを受けて、マラソン世界一の一万倍のスピードで、素っ飛んで来たんですよ」
洋子は私の顔を改めて見るように見た。狼狽しても顔を背けたりはしない。
「ははん、わかった。小母さまったら、わたしのことを、真犯人の何かかと思ったんでしょう！　当たり！」
「真犯人側の何等かの反応が現れるのを、期待しすぎなんですよ。今までだってずーと、何の反応も現れなかったのに……」
わたしは学生証を取り出してみせる、洋子はおおげさに両手を宙に開いた。。
「全く、反応がない。こんなことの繰り返しではどうしようもありませんね。昨日、あの方に面会して来ましたわ。お金を入れるところのついた腹巻が欲しいなどと、スタイリストだった筈のあの方が……。いよいよ頭がおかしくなって来たのではと、心配なんですよ」

よく見れば学生証の写真のスタンプは、少しずれている。土方洋子は、何か記憶をまさぐるような見方で、何時までも見つづけていた。

「真犯人の孫娘の方が、あなたの大學にいるんですよ。名前は瀬波理子さん。わたしはその娘に会って、真犯人に面会する手掛りにしたいんです。いきなり出かけても狂人扱いにされるのが関の山でしょう。ですから、手続を踏んでいけば、きっと証言してくれた紺野ますえさんも、同行してくれると思いますよ。だめなら、わたしひとりで突進です。もしも犯人が、昔の性根を現わにして、わたくしを殺せば、何よりも、彼が真犯人であることの証拠になりますもの」

「そこまでなさるのは、そこまで小母さまを動かしているもの、その原動力は何ですか？　一度お聴きしたいと思っていたんです。それほどまでに、天道さんを愛していらっしゃるんですか？　それとも……」

「そんな、おわかりになりませんか？　そこまで真犯人が憎いからですよ！　それだけ多くの人を犠牲にし、他人に罪を着せたまま、のうのうと生き延びている犯人が、わたくしには、どうしても許せないのです」

土方洋子は、きりっと身を引き締めて、わたしをみた。単なる老いらくの恋と茶化されるのを、必死で払いのけ、大袈裟に身震いしている。

「あなたも、しっかり聞いていて欲しいのよ。その時は、わたしが殺された時はって、ことですよ。その時には、あなたは、瀬波桂馬にわたしが出した手紙を公開して、世間に対して一部始終を語り、無実のあの方を救って戴きたいのです。それによって再審に持っていけるかどうかは、あなたの腕とお人柄しだいですよ」

「わたしに？　そんな、重大なことを？」

わたしは動転していた。でも、これも何かに使えそうな気もして、早々に切り替える。

「お力になれるなら精一杯やってみます。もしも、そんなことになったら、ですけど……」

「私は朝のジョギングと、夕方の買い物以外は家におりますから、あなたは瀬波理子さんとお近づきになって、ことの真相を伝えて下さいませんか……。いくら真犯人の孫娘でも、若ければ正義感をまだ持ち合わせているでしょう。なりゆきは電話で知らせて下さい」

頷いていた。わたしの体の中で神経の木が重苦しく枝を張りつめる。自分に近づき、自分を手なづけ、祖父を洋子に引き合わせるという、ごく簡単なことに過ぎないのに……。

高雄駅で降りると、暫らく歩いた。左手丘陵にそって、青いガスにけぶる新興住宅が拡がり、建売住宅らしい家が幽霊みたいに浮上していた。目的地まで二キロばかりの坂道を、土方洋子は息も切らさず、事件の真相や、裁判について話続けた。それは後継者に伝授する執拗さで……。

白いタイル貼り、青のスレード葺き屋根の二階建があり、紺野の表札がかかっていた。女は七十過ぎから八十位、顔を蒼く沈ませていた。照明を故意につけていないのだ、それは、土方洋子に対する拒否の意思表示か？　わたしは洋子の背に隠れるようにひっそりと立って、父との、わたしとの、類似を探していた。

これが、祖母？　始めて見る老女はわたしが孫と気づいた風もなく、顔を伏せたまま眼をあげようともしない。

「あらあ、奥様、お久し振り、お元気そうですね。ああ、良かった、良かった！」

洋子は場違いな陽気さで喜びを爆発させる。

「寝込んででもいらしたら、どうしようかと、ずーと心配していたんですよ。元気なく見えるのは照明がついていないからです。大丈夫よ、広子さん、この方が紺野ますえさんです。覚えておいて下さい」

洋子はハイタッチでもしかねない騒々しさで、ますえの感情を逆撫でにする。わたしは思わずますえをかばうように洋子に向き直った。

「土方さん、こちら、ご迷惑なのではありませんか？」

「土方さんでしたね。本当に申しかねますが、あなたとお話するのを、よしなさいって息子にそれはきつく言われておりますので。どうぞ、お引取りください。この前申し上げましたことも、どうぞ、お忘れ下さい。一度口にしたことをお忘れ下さいと申し上げるのも、おかしなものではございますけど……。あれとて、わたしの方から、お話申し上げたというものではなく、誘導されてお話してしまったものでございますから、どうぞ、お忘れ下さいますように……」

紺野ますえは必死で土方洋子を振りほどこうとした。ますえには、この世の一切のものを望まなくなった人間の、つれなさみたいなものがあるような……。

「あなたは、事件後、三日目に犯人に殺された大江桃子さんの家の押入れの中に、犯人のものと類似している茶色の長靴と、軍隊用の医療ケースや薬壜が隠してあるのを、確かに見たとおっしゃいましたわね」

洋子が高圧的な言い方をした。

「いいえ、あなたが、桃子さんの妹さんがそう話したとおっしゃって、わたしは、ただ、そうかと、

思っただけです」
「それから、瀬波先生は事件のあと長い間、事件の載っている新聞を持つ手が、わなわなと震えていたとおっしゃいましたわね。そしてあの時間に、彼は確実なアリバイは何もないとおっしゃいましたけど、それに変りはありませんか？」
「……」
「あの事件の後で、大江桃子さんも殺されたのだとあなたはおっしゃいましたね」
「大江桃子さんの妹さんがそう言っていると、あなたが、おっしゃったから、そうかもしれないと思いましたけど、私自身はなにも存じませんの。ただ、解っていますことは、あの日、あのひとは、医院にも、自宅にもいなかったと申しあげることが出来るだけです。そして多分桃子さんのところにいらしただろうと思っていましたと、そう申しあげました。ですから、お話はもうご遠慮いただけませんか。あなたは天道さんを助けたい一心で耳を傾けておいでだから、そんな風にお聞きになっておしまいになる。わたしは少なくとも、息子や、孫のために、あの家の安泰を祈っているんですよ」
　ますえはきっぱりと言い切って顔をあげ、わたしの顔をみた。
「でもあなたは離婚の原因は海浜銀行事件にあったと、涙ながらに話して下さったのですよ。それについては、どう、説明なさるんですか？」

「そう、言ったかどうか、あの時はわたし、精神的に不安定になっていましたから……」
ますえは無表情に眼を閉じている。一刻も早く足音が遠ざかるのを待つように、ドアに向かってすっくと立ちあがった。洋子はすっかり武装してしまったますえに、当惑したように声をつまらせる。
「こんなに豹変してしまうなんて考えられないことね。息子さんとおっしゃるのは病院長、瀬波晴朗さんのことですか？」
祖母は死んだと聞かされてきたのに、父はこんなところに祖母をかくまい、指示を与え続けているのだ。孫ってわたしのこと？
わたしは前に出た。祖母にわたしがわかるだろうか？　ますえの耳がわずかに動いた。
「もし、もし……」
わたしは手を祖母の目の前でそっと振ってみた。眼が見えないのだ、洋子はそれに気づいていない。酷薄な印象はそこから来ているのではないのか。わたしは洋子に向かって首をふった。
帰途洋子はさすが気落ちした表情をかくせないのか、すっかり無口になっていた。それでも別れるとき、
「あのかたの前回の証言は、テープに入れてあるのよ。打ち消してもどうってことありませんよ。とうとう、家族ぐるみで防衛戦に出て来たんです。わたし達も戦いを買ってでなければなりませんよ！」

土方洋子に撤退はない。
「大江桃子さんの妹さんは？」
洋子は強く首を横に振った。いざとなると、皆尻込みしてしまうのだろう。なんだか洋子が気の毒になる。わたしも又、彼女を手だまにとろうとしていた……。

真岡哲はうまくやってくれるだろうか？　わたしは土方家の庭木の影に蹲って時計をみていた。昨日電話で打ち合わせはしてある。
……「哲！　こちら、理子です。わたしの家庭的背景も、あなたの家と、とても似てきたわ」
「似てきたってどういうこと？　また、理子の冒険好きが、何か変なこと企んでいるんじゃないだろうな？」
「さあ、それで、お願いなんだけど、こちらの二十日午後二時、から、二十分間、そちらの何時かし

ら？　サマータイムなんでしょう？　そう、その時間から、二十分間、土方洋子って言う人を電話口に釘づけにして欲しいのよ」
「なんで？」
「カナダからの妙な国際電話でびっくりさせて見たいのよ。ただし、わたしの名前を口にしたら駄目よ、よくって！」
「妙なことを頼むもんだね。……チャーリーでも狩り出すかな。彼ならＯＫするよ、きっと。一寸待っていて、こちらでは話は早いよ。彼は世界中の国に一人ずつガールフレンドを作るのが夢なんだ。まだ日本にはいない。ああ、チャーリーは喜んでＯＫ。僕が通訳を買ってでるよ」
「じゃ、お願いね、大変なことがかかっているんだから、よろしくね！」

土方家の中で電話のベルが鳴った。一回、二回、三、四、五、六、洋子が居間から、玄関に駆けていくのが見えた。雨戸は何時ものように開け放たれていた。
「国際電話ですって？　カナダ？　カナダですか？」
洋子の素っ頓狂な声が舞い上がる。

わたしは改めて周囲を窺いながら、縁側に上がり、上がり石の上に丁寧に靴を揃えた。座敷の違い棚の上、蒔絵の小箱から、脅迫文のコピーを、用意したバッグに詰め込んだ。ためらいもしなかったし、手も震えなかった。お祖父さまも本番では震えはしなかったのだ。花壇のあたりで白いものが土の上を動いたような気がしたが、車のサイドミラーに跳ね返った光線だったかもしれない。

道路に出るとき、わたしは空き缶を蹴飛ばした、空き缶は車道に飛び込んで止まった。その音を聞き咎められるかもしれない、急ぎ足になる。

スモックともじゃもじゃの帽子、ぶかぶかのスカートは途中次々バッグに放り込んだ。

家に帰ると、わたしは息せき切って自分の部屋に飛び込んだ。母の冴子が不思議そうに覗き込んだ。

「どうしたの？　わたし今、お祖父さまのお家から帰ってきたところなのよ。あなた、お祖父さまのお家に入り浸りなんですって？　ところで、あのお祖父さまのところの表札、あれ、何とかならないのかしら。わたし本当にあれ、読めないわ。風雨に晒されてああなったのかと、考えてみたけど、よくよく見ると、そうではないのよね。あれは始めから、出来るだけ読めないように苦心して書かれたものに見えるわ」

母は言った。今頃になって、呑気なものだわ。何百回見たかしれないのに？　あれは桂馬のおびえ！桂馬は五十年前から、逃亡者なのだ。母は続ける。

「お祖父さまはご立派な方なのに、あれでは卑劣な人間に見えてしまう。正々堂々と見えないと、損だと思うな？」

わたしは無言で、バッグから、もじゃもじゃの帽子や、スモックや、ぶかぶかのスカートを取り出した。母は妙な顔をして引っ込んでいった。自分が正気なのか、正気でないのかわからないが、こうなったら、本当に悪を誇りにでもしなければ、生きていられない気がする。わたしが祖父から引き継いでいるＤＮＡは、犯罪の認識を全くもっていないばかりか、今にもＶサインをしようと、待ち構えていた。

しかし、真面目に考えて見れば、洋子は警察に届けるに違いない、これは刑事事件なのだ。一番疑われるのはわたし、村田広子、または瀬波理子。洋子にわたしの正体がばれるだろう。その時はその時だわ、真犯人は自白するのだもの。

警察が来ないうちに洋子に電話をして様子を見る……。こんなもの、盗んだところで、彼女は新しくまた書くに違いないのに、わたしは電話をしている。洋子はすぐ出た。

「あら、広子さん！　さっきは大変でしたのよ」

「大変って？」

わたしは出来るだけ短く言った。

「それがねえ、妙な電話がありましたのよ。カナダからの国際電話ですって通訳がいいましたの。それで、ぽかんとして、ああ、息子がカナダに出張でもしたのかな、なんて思いましたのよ。真面目に考えれば来月アメリカに出発なんですよ。そしたら、いきなり、カナダ人だと思います。チャーリー、ハリスンって方が、ハロー、ミス、ヨーコ、ヒジカタとか、何とか申しましたのよ。私も、ハローとか、ハワユーとか何とか必死で言っていましたの。息子が外国で交通事故にでも遭ったのかと思ったりして……。そしたら、通訳の方が、彼はミス、ヨウコとお友達になりたいのだと、彼は二十一歳で、ジャパニーズのガールフレンドとして、あなたを選んだというんですよ。それで、わたし、オオ、ミステーク。アイアム、ミセス、オールド、ウーマン。だから。お友達になれません。そう言って下さいと、いったんですのよ。そしたら、オールドウーマン？　ＯＫ、ＯＫ、っていうんですの。彼のお祖母さんが最近亡くなられたのです。だから、僕のお祖母さまになって下さい。そう言っていますと、通訳の方がいったんです。私悲鳴を上げてしまいましたの。そんな、どうして、私なんですか？　世界中に女の方なんて何十億もいるじゃありませんか？　何故私にそんなことおっしゃるのでしょうか？　ミー、ノーイングリッシュなのに、どうしてなんですか？　どうやってお友達になれるんです。遠い遠い、小さな国なんですよ。そこの、汚いお婆さんと、何を好んで、お友達になりたいんですって申しましたの。そしたら、何と先方が答えたと思います。ああ、広子さん、お聴きになってくださ

ってる？」
「ええ、聴こえています。とても可笑しくって……」
「ねえ、可笑しいでしょう！　そういったら、彼が言いましたの。あなたはいい人だからお友達になりたいのだって……。いいひとだなんて如何してわかりますの？　一度もお会いしたこともお話したこともございませんのに？　私、ただ、唖然としてしまいましたのね。そしたら、科学的なんですよ、あなたのことはコンピューターに入っていて、僕の理想の女性であると、インターネットが選んでくれたというんですのよ」
「まあ、カナダのですか？　アメリカですか？　すごいわねえ、おばさま、それでは国際的善人というわけね！」
「そういうことに、なるのかしら。なんて、何だか馬鹿にされているみたい。狐につままれているみたいですよ」
「おばさまほどのお方なら、そんな風に本当にコンピューターに入っているのかもしれないわ」
洋子はまだ、配達証明郵便のコピーが紛失しているのに気づいていない。チャーリーも、哲もやってくれるわ。わたしは涙が出るほど笑った。おかしな人達！
「まだ、瀬波理子さんに接触できていません。ご免なさいね。近いうちにきっと！」

哲たちも彼らなりに楽しんだのだ。そんなのが好き！　鏡のなか、わたしの上気した眼が、なんときらきら輝いていることか！　もしかしたら、遺伝的に罪悪感が欠落しているのではないのか？　哲から、大伯父さんの犯罪を聴いた時のあの羨望と、ときめき。　犯罪を冒険と受け止めて、わくわくしていたのだ。銀行は保険に入っているのだから、誰も困らないのだもの、勿論そうでないこと位わかっているわ。……その上で言っているのよ。

今、わたしは、祖父の自白を前に、生れて始めて犯罪を冒した。自分が桂馬と会うときは、死を覚悟しているから、わたしに、これを託すと土方洋子は言っていたのに……。

「お蔭さまで、うまくいったわ。ありがとう！　洋子小母さんから、お話聞いて、最高に、楽しかった！　チャーリーにもよろしくね」

「そうか、よかったな。二十分て、結構長いんだよね。それなりに苦労したんだぞ！　でもさ、チャーリーの奴は、是非、洋子小母さんをガールフレンドにしたいと言っているよ。しつっこく反撃して

くるのが面白かったらしいよ。彼はペテンが大嫌いだから……」
「なら、わたしは失格ね。電話の間に、ちょっとした盗みを働いたのよ」
「……へーえ、で、うまくいったの？　そうかあ、で、何を盗んだんだよ？」
「まる秘書類」
「知能犯じゃないか？　理子がねえ？」
哲は長い沈黙の後でいった。
「わたしね、自分でも、驚いてるんだけど。盗みなんて軽いもんよ。わたしの祖父は殺人犯なの。如何して今までわたしに話してくれなかったんだろう？　もう少し早かったら、わたしの話題が豊富で、哲を退屈させなかったのにね。残念でした！」
「おい、おい、カゲキだなあ、僕の大伯父が銀行強盗だったからって、無理すんなよ。あれはさ、きみの家でさあ、僕の家の家系調査でもしたらと、先手をうったんだからさ！」
「そうだったの。それなら心配ないって、そちらのお家からクレームがつくわよ。ご立派な家系、大変なＤＮＡを、わたしだって隠したいのが本音だわ」
彼にはよく理解できていない。わたしが、いよいよ、清濁併せ呑んで人生に向き直ったのだと言うことが……。

「そうだ、哲、あなたには、言っておかなければ。わたしは、今、或る人に自白を勧めているのよ。それがどうなるかは、わからないけど……」
「何が何だか分からないが、危ないなあ、大丈夫か？　つっぱり過ぎるなよ。人間心理は複雑だから。この大學のメモリアルチャーチの前で、今日、殺しがあったよ」
「そうなの、哲、殺されたら駄目よ。わたしを忘れないでいて！　愛しています！　本当の本当よ！」
太平洋をはさんでの対話は、実のところ哀しみと対面しているのか喜びと対面しているのかわからない。雲を掻き分けるような惚けた時間に、わたしは必死で何かを伝えたくなる。
「そうだ、なら、僕も、言っておかなければ……。乞うご期待！　の部分だよ。理子は海浜銀行事件てのを知ってるかな。昔のことだよ。五十年はたっているだろう。僕の大伯父はそれに関係していたんだ。主犯ではないが、それを知った時の驚きは……。きみにはわかるまい。銀行強盗だけなら陽気に聴いて、夢見ていられる。でも、それが、殺人と絡んでは総てが変ってしまう。僕の大伯父は盗んだ小切手を翌日、犯人に頼まれて現金化しただけなんだ。大伯父が僕に話してくれたのは、僕が高校生のとき、事件はとうに、時効になっていた。でも、主犯については決して口を割らないんだ。僕も理子ほどの勇気があればと、しみじみ思うよ……。びっくりしたの？　ごめん！　そんなにびっくりした？　そう、じゃ、……またな……」

あまりのことに、わたしは声がでなかった。そんなことが、そんな偶然があっていいのか？　しかも彼は、大伯父と、主犯との間に決定的な線を引いて見せた。電話は切れていた。

今更、それが、わたしの祖父だとは……。

そう言ったら彼が、どう出るのか、わたしにはわからなかった。彼を失うのだけは、何としても阻止しなければ……。

わたしがＶサインをすると祖父は満足そうに右手をあげた。

杉子がお茶の道具を持って階下からあがってくる。

「わたしびっくりしちゃった。あんなところでお祖母さまの消息をきくとは夢にも思わなかったもの」

杉子は、はっと、挑戦的な顔を向けた。

「紺野ますえ、それがわたしのお祖母さまだとわかるまで、時間がかかったわ。可哀想なお祖母さまは今も転々として一ヵ所に留まっていらっしゃることがないみたい。何を避けて、何から逃げていら

っしゃるのか？　八十はこえていらっしゃるのに！」
「何がおっしゃりたいの。はっきりおっしゃって下さい」
わたしにこの女は干渉の手を伸ばす気配を見せてきている。祖母の離婚に、この女が拘っていたのだろうか？　桂馬は身勝手で、聞きたくないときには聞く耳を持たない。沈黙している。
「なあに、杉子さん！　そんな怖い顔して？」
「あの方が、あることないこと言いふらしていらっしゃらなければ、こんなことにはならなかったんですよ。離婚の腹いせに」
「どんな風に？」
わたしは新しい発見でもしたように、杉子を見つめ直す。この女は何を護ろうとしているのだろう。自分か？　祖父か？　遺産か？　手紙のことも、祖父が自白することも、みんな知っているのか？
「で、あれは、元気か？」
桂馬が白い頭をもたげた。
「それが、わからないの。最近は消息不明ですって」
わたしは咄嗟に嘘をついていた。
杉子の肩がほっとしたように撫で肩になったが、尚自分の怒りをしっかり脇の下にたくし込むよう

に、和服の袖を帯にはさんだ。
「よくやったな、理子。その調子だ！」
桂馬は立ちあがるとわたしの頭を軽く叩いた。杉子がすかさず、桂馬の体を支える。帰れという意思表示だ。
「お祖父さま、準備ＯＫ、出発進行！」
わたしは祖父の後ろから体を押しながら、子供の頃のように笑った。

瀬波家は病院の隣り、緑に囲まれたレンガ色の洋風建築で、わたしの父晴朗が、三世代住宅として何度も何度も図面を引き直させ、三年がかりで建築した自慢の建物だった。今は建物の広さの割に住人は三人の家族と使用人夫婦の五人で、広さを持て余していた。同居して欲しいと言う父のたっての希望を、祖父桂馬は拒否したのだ。
家に帰ると、わたしは、玄関でいきなり、父と母と叔母の三人に取り囲まれ、何が何だか、両側か

ら持上げられ、リビングに軽々と運ばれてしまう。
手を離されるとわたしはバランスを失って、人間でないみたいに、ソファにのめりこんだ。
「何をするのよ！」
わたしは無意識にバッグを抱き寄せた。ドアをロックする母、何があったというの？
わたしは抗議するように、ソファの上にあぐらをかく。
「杉子さんが教えてくれなければ、何も知らずにいるところでしたよ」
叔母が口を切った。やはりそうなんだ、あの女、忠義面をして注進に及んだのだ。
「お前、何を目論んでいるんだ！　説明しなさい！」
珍しく父が怒っている。
「おおよその見当はついているんだ！」
「だったら、聞くことないじゃない！」
わたしは大声で毒づく。温厚な父が頭を抱え込んで、叔母に助けを求めている。
「お前、お祖父さまのところに入り浸って、なにをしているんだ？」
「あら、嫌だ、分かってるって、たったいま、お父さま、おっしゃったじゃない！　わたし、少なくとも、こんな扱いを受ける理由はないわ！」

「そうかな？　気違いのよこす配達証明郵便を真に受けて、お祖父さまを責めたてているそうじゃないか？」
「あの、婆あめ！　何勘違いしてんだか？」
「なによ、それ、おすぎさんのこと？　理子、何時からそんなにがらが悪くなったの？」
母もいい加減なものだ。わたしを犯人を捕らえるみたいに、運び込んでおきながら。
「何時って、今にきまってるでしょう！　こんな扱いを受けて、お嬢様でいられるわけがないじゃない」
「あなた、その女と付き合っているんですって？　それって、本当なの？」
叔母が核心にふれてくる。
「そうよ。だからって、それがどうだっておっしゃるの？」
「言っておくが、そんなことは皆、嘘なんだよ。その女は勘違いしているんだ。前からそういった嫌がらせはあった。被害者は刺激をさけて、無視するのが一番。それが常道なんだよ。だから、お祖父さまはそうして来た。それを何んでおまえが、何にも知らないくせに掻きまわすんだよ、下手をしたらどんなことになるか、空恐ろしい話だな」
「そうなんだ。解ったわ。よく御存知じゃないの。わたしより、お父さまの方があの事実を知ってい

るんだ。もしかしたら、叔母様も？　お母様まで？」
「理子も、お祖父さまも、どうかしてるわ。そんな人と付き合ってどうしようっていうのよ！　大体その手紙に何が書いてあったというの。わたしには全く見当もつかない」
叔母が本当に度肝を抜かれたという顔をして大袈裟に腕を広げた。
「知らないというのなら、わたしが教えてあげるわ。事実を耳にして、お祖父さまを見る眼が百八十度変るのか？　それとも変らないか？　興味あるところね！」
叔母は胸を腕で締めあげ、探るような眼を父に向けた。彼らはわたしの帰る前に充分に密談を重ね、わたしを言いくるめる効果的な方法を探ったんだ。油断しては駄目よ。魂胆なんて見え見えだわ。ほら見て！　テーブルの上の灰皿、口紅のついているのと、いないのと、吸殻は二つに分かれて、堆くなっている。叔母と父。お手伝いを締め出して話し合った証拠。
沈黙が続いている。ペアの三組の眼がわたしを押さえつけ、ねじ伏せたがっていた。
「ほら、そういうのって、何ていうんでしたっけ」
叔母の手が鼻を包むと、五個の指輪が、顔の中央で星型になってきらめく。
「何？　コルサコフ氏病のことか？　この病気は錯誤と虚談癖があってね、根も葉もないことを真実みたいに言い立てるんだよ」

「それそれ、何も知らない理子には、真実だと思えたのよね。お祖父様はそれだわ、病気なの。だから、刺激しては駄目よ！　なにしろ、もう、八十五歳だから」
「いい加減なことを言わないで欲しいわ。わたしは大学生なんだよ。コルサコフ氏病だと言われたのは、お祖父さまではなく、無実の罪で獄中にあるひとの方じゃない！　いい加減な病名をつけて、有罪にされたんだよ。心が痛まないの？」
わたしは土方洋子の言葉を思い出していた。
「それで、お祖父様は、その人の言ってることを、どうおっしゃっているの？」
母が作戦を転換した。
「いい線いってるなあ、あの女はなかなかなものだよって。そう言ってたわ。面白いでしょう！　お祖父さまの方が一枚上のようね」
「全く、みんな真面目じゃないんだから。もう、知らない！」
母が両手をあげた。
「何を騒いでいるのよ。こっちが聞きたいわ。わたしはね、お祖父さまのために、泥棒を働いてきたのよ。家族に締め上げられるなんて心外だわ」
「泥棒ってなんのこと！　理子が、お祖父さまのために？　どうしてそんな危険なことをするのよ。

駄目よ。そんなことしちゃ！　大丈夫なの？　見つからなかった？　お祖父さまは卑屈よ。あの表札にしたって、どう見たって、隠れているって感じだもの。理子にもしものことがあったら、わたしだって、黙っていないから……。理子だって可哀想よ、真岡哲くんと一緒にカナダに留学したいというのに、お相手は医師でなければならないって、皆揃って反対したかと思えば、今度はお祖父さまをけしかけてるのなんのって、疑いをかけて、これですものね。ご自分たちのお父さまが大切だからって、そのお父さまのために、未来のある、わたしの理子は盗人までさせられているのよ。引っ張られたらどうしてくれるんです！」

母はわたしの側に席を移し、わたしをオーバーに抱き締めた。くすぐったい。変な具合だ。父と叔母は豹変した母を持て余して、ただ、閉まりもなく口をあけている。

「あのお妾さんがなんと言ったのかしらないけど、わたしは土方洋子さんの家から、配達証明郵便を盗んできたのよ。盗るときはふるえなかったのに、これを見て！　今になって震えが止まらないの。そういうものなのね。他の人に置き換えて色んなことが解ってきたわ」

「で、それは何処にあるんだ？」

父が、我に返ったように言った。

わたしは、バッグのなかから、関係書類を引き出すと、テーブルの上に無造作に投げ出した。

「これが、土方家にあった手紙のコピーだわ。わたしは善意の第三者である、土方洋子さんを裏切って、お祖父さまの為にこれを持ち出したのよ。それでも、あなた方はわたしをまるで、人間でないみたいに引き立てて、揃いも揃って責めあげるんだから……」

母がこわばった表情でわたしの眼を捕らえた。わたしはにっこりして、見えないくらい頷いた。

「それにしても、土方洋子って何もの、五十年前の事件と結びつけて揺するなんて？」

叔母だけが昂ぶっていた。

「よくやったね、有難う。理子、これさえ押えてあれば、お祖父さまがおかしなことをしない限り我が家は安泰だ。財産も名誉もお前に引き継いでいく為のものなんだから、そこを分かって欲しいんだよ」

父がほっとしたように笑顔をみせた。安泰だなんて勝手な思い込みだが、わたしはこれ以上真実を語る気はない。総ては祖父に委ねたのだから……。その時、この人達はどんな顔をするのか？

「警察には分からなくても、土方洋子さんには、わたしが盗った事はすぐに分かるわ。警察に届け出ることも、もう一度書類を書き直すこともできる。安心なんて出来る状態じゃないのよ。だから、わたしを解放してくれる？　哲から、電話の入る時間なんだから……。わたしね、財産も病院もいらないの。わたしをカナダに留学させて！　真岡哲と一緒にいられればそれでいいわ。二人なら、銀行強

盗になったとしても、人を殺したりはしない。断じて！」
「留学なら、いいんじゃないの。結婚する頃になれば、事情も違っているかも知れない。それより、わたし、その土方洋子をやっつけてあげるわ！　精神病院に強制収容させるか、刑務所にぶちこむかの、どっちかね！」
叔母はまだ何も分かってはいない。
「わたし、生れて始めてお祖母さまに逢ったの。紺野ますえさん！」
父と叔母が顔を見合わせた。ぎょっとしたような間、父は荒々しく口を拭った。
「電話が来るんだろう、行きなさい。とにかく勝手なことはもうしない。いいな！　それに、当分家で静かにしているんだ。もしものことがあったら、どうする？」
「いい娘ね、お部屋にいっていなさい」
母がわたしを抱き締めてからいった。
振り返ると、母が激情に駆り立てられたように、泣き伏すのが見えた。
彼らは結論に達したのだろうか？　この先どんな妨害が入ったにしても、わたしはしたいようにする。家族など、もともと誰にとっても馬鹿馬鹿しいものよ。桂馬もまた、一生をかけてそれを失う計画をたてているのだ。こうなっては、一刻も早く真犯人であると自白するテープを作り、ポストに投

函しなければならない。

わたしは自分の部屋に急いで、階段を猛スピードで駆けあがった。約束の時間は遥に過ぎていた。哲は大學に向かったのかも知れない。落ち着いて話したかったのに……。

「ハロー、理子です」

「ハロー、こちら、哲」

哲の若々しい声が耳に心地よい。

「カナダにも、空ありますか？　青ですか？　風吹いてますか？」

「ああ、抜けるようなカナディアン、ブルーだよ。風は木の香りを乗せ、頬を撫でて過ぎていく。詩人になった気分だなあ！」

「よかったわ！　空気もあるんだね、日本にはないよ。わたしね、一寸遅くなったけどカナダに行くわ。哲と同じコースをとるつもり……」

「そうか、そんなら、嬉しいよ。でも、何か条件でもついていそうだな」
「ママが味方になってくれたから、あとは簡単だったわ」
哲は鋭い感受性の持ち主だ。文学好きの大伯父に似ているのかもしれない。
「財産も、病院も、いらないって言ったから、みんな、困ってしまってね。哲だけでいいんだって啖呵をきったの。格好いいでしょう！」
「へええ、大変だったんだね。ところで、この間の話。分かったか？　僕んちはね、瀬波家と同格とはいかないんだよ」
哲の声が幕でもはったように遠くなった。
「ああ、この間は、余りの偶然に、ただ茫然としていたものだから、声も出ないありさまで……。本当よ。気悪くしたんでしょう？　でも、我が家はそれどころではないのよ。わたしの祖父はね、十月五日、八十五歳の誕生日に、自白をするというのよ。それを聞いてみなければ確かなことはわからないから……。哲にはその時にとった自白のテープを必ず送るから。それで判断して欲しいわ。負い目はこっちにあるみたい？」
「何だか分からないけど、面白そうになってきたんじゃ？　まさか、理子が真岡の馬鹿にあわせて、自作自演てなこと、してるんじゃないだろうね？　無理すんなよ、それがどうであれ、僕達は僕達な

んだからさ！　家の大伯父も、そんなやつの片棒を担いだりさえしなければ、大金をものにした、陽気な銀行強盗でいられたのにな！」
「そうなるんだ。考え方としては、それが自然なんだよね。わたしなんだか普通人の感覚が薄れていくようで、怖い気がする」
「洋子小母さんは元気？　いい人なんだろう？　話していればわかるよ。理子、とうとう来るか！」
「そう！　始めから、一緒にいけばよかったのに、わたしが家族の了解をとりたいなどと拘って。古いんだから、わたし」
「そうかあ！　嬉しくなって来たぞ。そう！　来るのか！」
「うん」
「キスしてもいい？」
「うん」
「じゃあ！」
「バーイ、またネ！」
「もう、一度……」

杉子が身動きひとつしないで、じっと向かい合って坐っている。わたしの箸の動きに応じて彼女の眼だけが動く。

「お祖父さまは？　どうなさったの？」

「休んでおいでですよ。お疲れになったんでしょう。電話が鳴りっぱなしで……」

「たんでしょうたって、あなたのせいじゃない。密告者はあなたよ！」

こんな大切な時に、ことを複雑にしているのは、この女なのだ。立ち聞きしているなんて……。

杉子は磯ギンチャクみたいに、唇の周囲に縦皺を寄せて突き出してから、ゆっくりと陥没させた。声は出さない。

もしも、わたしの妨害をするつもりなら、食事に睡眠薬でも仕込めばわけがないのだ。そうはさせない。ここでうっかり食事をとったら……。

わたしは小皿を取り落としている。彼女のご自慢の絨毯のうえだ。杉子は不機嫌そうに傍らに寄って来て片づけはじめた。わたしは素早く彼女の逆手をとる。

「あなた、お祖父さまを何処に隠したの？　言わないとひどいよ！」
「痛い、何をなさるの。ご自分だけ若いと思って、馬鹿にしないで下さい。籍は入っていなくても、義理でも、わたしは、あなたのお祖母さまですよ！」
「あーら、そうなの、知らなかった。お手伝いさんだとばかり、思っていたわ」
わたしが手をゆるめると、言いたいことを言って気が晴れたのか、杉子は改めて、わたしに向き直る。
「お祖父さまは本当に寝室でお休みになっていらっしゃるのよ。理子さんは、小さい時からお祖父さま思いでいらっしたから……。色々心配してるんでしょうけど……」
「けど、なんですか？　あなたのお蔭で、わたし、吊るし上げにあったんだから……」
「お祖父さまが、変に昂揚していらっしゃるみたいでね。楽しそうではあるんですけど、何だか心配だったんですよ。理子、理子ってあなたは、お祖父さまの夢のなかにまで登場しているんですから」
杉子は着物の襟を素早くかき合わせると、わたしの機嫌をとるように言った。
桂馬は本当に自白できるだろうか？　真犯人でなければ知りえないことを、明確にすることが出来るだろうか？　肝腎のところを理解出来ているだろうか？
総ては桂馬にゆだねてある。それについて探索しない、質問しない。それが条件だった。それでよ

かったような、失敗だったような。
誰が策略を回したところで、そう簡単に桂馬の決意が揺らぐわけがない。あの事件が、彼の一生での、クライマックスだったんだから。わたしは震えながらも、せめて、マッチ売りの少女のように、マッチをすって、彼の過去を甦らせて上げたい。
不安なのは、桂馬が約束の日の前に、逃げをうつのではないかということ、洋子が乗り込んでくること、または父や母や叔母が先手を打って、桂馬を病院に押し込めてしまうこと。
杉子は勘定に入れていなかったけど、この女に桂馬の考えが分かっているのかどうか？　真犯人であることを告白するのだと知ったら、昨日のように、父母たちの陰謀に加担していくのだろう。
わたしは杉子のすきを見て、祖父の家から脱け出していた。
路地を曲がった。何度でも、巻いたつもりなのに、足音は空洞の中を来るように、響き渡る。極度の緊張が苦痛になる。
わたしは村田広子の学生証を裂いて散した。もう、分かっている。嘘が耐え得る限界を超えた。つけてくるのは土方洋子に違いない。
「瀬波理子さん！」
土方洋子が追い越し、回り込んでわたしの前に立った。

「あとをつけていらっしたの？」
「そうです。お祖父さまのお家から。ずうっと！」
不思議と罪悪感を感じていないせいか、自然体でいられる。
「何か？」
「ええ、紺野ますえさんが行方不明になったんです。瀬波病院にでも隔離されてしまったのでは？　お力をお借りしたいの。あなたのなかに見たいのよ、正義を！」
洋子はわたしの手首をぎゅっと握った。
「気づくのが遅かったわ。あんな電話は学生さんのいたずらでもなければ説明できませんものね。ちょっと頭を冷したら、何もかも分かってきたわ。あなたが、瀬波病院長の娘で、真犯人の孫だということが……」
わたしは大きく頷いた。
「でも、わたし、本当は、隠れるつもりなんて、なかったのよ」
「でも、手紙は返して戴きます」
「もう、その必要はなくなるのよ。本当です。わたしは、祖父を信じます。その為に邪魔になるものを、わたしが排除したんです。近いうちに、祖父は動きます！　黙って見ていて下さい」

「何時です？　それを教えていただかなければ……」
「十月五日」
洋子の手がわたしの肩にかかっていた。
「本当なのね！」
わたしの肩を揺さぶる、余りの激しさに奥歯が鼓膜のそばを噛んだ。
「祖父を信じるしか、わたしには方法がないんです」
わたしは大きく頷いていた。
「その後で、彼に会わせて下さい」
「いいですよ。祖父が会うといったら」
ともしたら、そんなことも、あり得るのかもしれない。桂馬は強靭な精神力で自分の犯罪と対決しようとしているのだ……。
「そう、五日ですか？　いざとなると、怖いから、呼吸を整える時間があって幸いというものかも？」
土方洋子は牙を抜かれた猛獣のように、すっかり大人しくなって、涙ぐんでいる。わたし自身、この女を桂馬に逢わせたいのか、逢わせたくないのか、わからないのだ。
わたしがぼんやりした隙、バッグが奪い取られていた。

洋子は逃げながら、叫ぶ。
「これはわたしのものですよ。わたしが取り返すのは当然のことだけど、あなたが、またも取り返そうとするのは犯罪よ。追い駆けないで！　年はとっても昔、百メートルを十六秒で走ったのですからね。これはもう、死んでも離しませんよ。追ってくるなら、警察まで走りましょう。泥棒はあなたなのよ」
追いついても、バッグに手をかけても、洋子はわたしの手など簡単に振りちぎってしまう。彼女は歩道橋の階段を駆け上がっていく。
まだ陽は高く、昼休みの時間は車の通行も少なく歩道をいく人もまばらなのに、規則を護る習慣が身についているのか、洋子は歩道橋を選んだ。
いまだ！　階段を登るスピードは若い者にかなう筈がないんだから。わたしは一段づつ飛ばし、難なく歩道橋の上で洋子に追いつく。
バッグの紐を握るとバッグごと洋子の体重に引きずられた。
「この中のものはわたしのものなのよ。あなたのものであるわけがない」
「なら、中をたしかめるから？」
口で言っても洋子はバッグをしっかりと小脇に挟んで肩をせり出してくる。わたしは洋子の顎を肩

で押し上げ、歩道橋の手すりに追い詰め、押し付けながら、バッグを掴んでいる洋子の指を一本ずつ剥ぎ取りにかかる。指は剥いでも剥いでも、またも貼りついてくる。苦心の末、漸く奪い取り、バッグを持つ手を思いっきり手すりの向こう側に突き出した。

「ほーら、届かないでしょう。身長がものをいうのよ」

洋子の手は遥に遠い。わたしは笑い出してしまう。

「そんなもの、今頃、この中にあるわけがないでしょう。もう、消滅したのよ。もうなんの意味も持っていないんだから！」

洋子は身をせり出すようにして、わたしの手に絡みつこうとした。本当にしつっこいんだから。わたしは背の高さを誇って、さらに体を手すりから、せりだしてから、からかうように、バッグを翻した。

その瞬間だった、手すりによじ登る形で、洋子が身をしなわせてバッグに飛びついた。洋子は重心を失って空を泳ぎ、気がつくと、わたしの腕が軽くなり、そばには誰もいなくなった。

道路を行く車は少なかったが、わたしが歩道橋から駆け降りて、バッグを拾いにいく前、二三台の車が止まり、洋子のそばに駆け寄っていった。洋子から、五米ほど離れたところに投げ出されているバッグをわたしは素早く拾いあげた。

洋子をわたしは落としたのだろうか？　逃げよう！　顎がかたかた歯を噛んでいた。
砕けた頭蓋骨、長く伸びた足、滲み出した血。情景がいつまでも眼に浮かび、走っても走っても情景が付きまとうもどかしさ。
走りつづけた。暑さで胸がつまった。パトカーの音。もう、非常線が張られたのかもしれない。細い路地から路地を曲がった。湿っぽく黴臭い風が隙間風のように通っていたが、その先が見通せない。思考の切れ端が足にまといついて歩行を遅らせる。
わたしは着ていたジャケットを脱いで、裏返した。白いのが赤と茶のチェックになった。
パンツの裾を四回折り曲げて膝下まであげ、早変りすると、わたしは広い通りに出て、群衆のなかに自殺するように飛び込んでいく。
……中年女性、歩道橋から転落死！　突き落された可能性も！
大田区霞町三丁目、無職、土方洋子さん七十三歳が、二十三日午後一時頃、川崎駅前の歩道橋から、転落、即死した。転落直後、現場から逃走した女を目撃したとの情報もあり、何者かにより突き落された疑いもあるとして、警察では現場の聴き込み捜査をおこなっている。福岡市在住の長男、土方竜一氏によると、洋子さんには自殺するような心当たりはないが、最近、不審な外国人からの国際電話があったと気にしていたという……

疲れきって、総べてのエネルギーを使い果たしたのに、新聞を読むとき、テレビニュースを見るとき、わたしは充電されたみたいに、ぶるぶる震え続けた。そういう振動をする機械そのものになったみたい。震えるということが、こんなにも激しい現象だなんて、今まで考えても見なかったわ。

わたしは土方洋子を殺したいなんて思ったことなんてないわ。突き落したわけではない。独りで落ちたのよ。猫でもあるまいし何も飛びつくこと、なかったじゃないの。七十三にもなって、何にでも執拗で物見高かった罰よ。

でも、わたしは何故、手紙類を返してやる気にならなかったのだろう？　わからない……。そこで返す位なら、盗ることもなかったのだから。それが、祖父を護ることになるような気がしたのだ？

あれを盗んだ目的はなんだったのか？　盗んだところで、洋子が生きている限りは……。こうでなくては何の意味もなかったのだ。ご免なさい、わたし必ず祖父に自白させるわ。土方洋子が亡くなったことで、自動的にわたしが天道亮太の無実を証明する使命を負ったことになったような。何時のまにか、わたしは洋子の遺志に縛られていた。

あれは事故！　電話が鳴った。叔母だ？

「理子、テレビみた？　良かった、良かった。あの女死んだわ！　自業自得よね、何にでも頭を突っ込む年増女の罪よ！　お蔭で安眠できそうだわ……」

桂馬は二階でカンガルーの毛皮を張ったロッキングチェアに掛けて、気持ちよさそうに体を静かに揺すっている。

半眼に閉じた眼、輝かしい白髪と、輪郭と傷痕を包む真っ白な髭。その姿は、頭のてっぺんから、足の先迄、柔和な気品にみちていた。

本当に世間は彼を犯人だと信じてくれるだろうか？　だから怖い気がする。そのため世間はこの人を見過ごして来たのだ。わたしが子供の頃、こんな風にうたた寝しているときなど、祖父はよくうなされていた。祖父にも罪の意識はあったのね。わたしや父を溺愛したのは、それによって購われた家族の幸福だったからに違いない。

今、彼は裏面史に自分の存在の爪あとを残そうとしている。

新聞社あてのクッションいり封筒が三枚、哲の為に一枚。カセットテープが四個、カセットテープを一つとってボイスレコーダーにセットし、わたしは桂馬のそばに腰をおろした。

これでぬかりはないわね。何度も自分に問いかけてみる。

桂馬の頭が急に胸に深く喰い込んで、何だかあるべき姿でないような、かすかな違和感。はっとして、わたしは祖父の脈をとろうとした。探っても探っても脈がない。直接桂馬の胸の鼓動を聴こうとして、その胸にもぐり込んで耳をあてた。暖かくて、鼓動はゆっくり耳うちをしてくる。生きていた。目の前が明るくなった。

「こりゃあ、どうした？」

「狸寝入りなんて、ずるい」

桂馬はわたしの髪を撫でていた。この手は幼い頃、何度、わたしの髪の上を往き来したのだろう。わたしは身震いした。祖父は人を十五人も殺した手で、わたしを愛撫し、わたしはこの祖父が死んだのではないかと、気も転倒していたのだ。

土方洋子の脅迫文の上に柔らかい光が集まっている。祖父の長い爪が封筒を引き寄せ、時間をかけ、検閲でもするように中身に眼を走らせる。

わたしはどんな祖父の表情も見逃すまいと緊張していた。一本の手が、横這いでテーブルの上を探っている。煙草を探しているのだ。

わたしは検閲のすんだ手紙を、ベランダの植木鉢のなかで、次々火をつけた。それは土方洋子の弔

いのように、瀬波家を丸ごと焼き尽くしかねない、不穏さで立ち上がった。
「お祖父さま、いよいよ、本番です。咳払いして！　そう、痰なんかからまっていませんか？　失敗したら、やりなおしたらいいんだし、わたしの他、この家には、誰もいません。安心して下さい。それでは、お祖父さま、だれもが納得いくように話せる？」
「コンセントを差し込んだらどうだ」
気づいていながら、眠ったふりをしていたのだ。入れた筈のプラグが何時のまにか引き抜かれていた。杉子だろうか？　誕生日のプレゼントを依頼したのに、出かける前に意思表示をしたのか？
何もかも分かっているのよ。そう言っているのだ。年をとっても、何故か、彼女の目尻は重力に逆らって上がりつづけている、油断はできない。
「お祖父さま、いいの？　本当に、嘘でなく、話せるの？　話したいのね？」
念を押さずにはいられなかった。彼は手をあげ、ボイスレコーダーのスイッチを入れるように促している。

自　白

「私は、千九百四十七年十月十日、午後三時十分、海浜銀行M支店にて発生致しました、強盗殺人事

件の、真犯人であります」
桂馬はここで、ふうっと息を吐いた。わたしは緊張で強張った手で水の入ったコップを、祖父の口元に運んだ。
「……当時、戦後の食糧難や、貧困からくる不衛生のため、各地で疫痢、赤痢、腸チフスなど疫病が多発していました。私はそれにヒントを得て、県の防疫斑を名乗り、閉店時間を見計らって、海浜銀行に押し入り、ＧＨＱの命令により、全員に予防薬を投与する旨宣言し、行員十九人を銀行中央に召集しました。私はズックの鞄から、大小二つの薬壜と軍用の医療ケースを取り出し、女事務員に十九個の茶碗と、私用の茶碗を一個持ってこさせました。この薬は刺激が強いので、歯に触れるとホーロー質を傷めるからといって、みんなの前で中和剤を入れておいたスポイトで、底の青酸化合物より比重の重い白い粉に到達したところで中和剤を送り込み混ぜながら吸い上げ。茶碗にとり、舌を前に出し包み込むように飲んで見せました。これは、一番始めに液を採るところで、安全性が確保できるものであります。ピペットをからにし、改めて吸い上げ、みんなの茶碗にスポイトで青酸化合物の成人一人最低致死量０・３ｇの溶液を分け入れ、
「さあ、安心して、私の要領で飲んでください。いいですか。一、二、三！」
と号令をかけました。飲み終わったので、全員を現場に釘付けにする目的をもって、第二液の水を

大瓶から、直接つぎわけました。そのうち行員は、症状を訴えながら、水を求めて洗面所や風呂場に殺到し、意識を失っていきました。その後の惨状については、生存者の伝える通りであります。

これにより私は何の罪もない、行員十五人を殺害し、四人は生き残りました。私は共犯のKと共に、現金と、小切手を奪い、外来者が侵入して混乱状態に陥る前、Kの運転する車で悠々と逃走したものであります」

桂馬はここで、言葉を切った。

共犯？　共犯なのに、一人で自白して大丈夫なの？　わたしは混乱していた。

「私の名誉のために申し添えますが、私と共犯者Kが手にした現金は報道されているものより、遥に多額なものでありました。これによって金融機関の金の動きは、時として計算不能に陥ることが証明されたことになります。事件の翌日、川崎の銀行にて、小切手を換金したのは共犯者Kの知人Mであります。当局は初動捜査において、多くのミスを冒しました。

その一つは、これを、単独犯行と決めてかかったことにあります。そのため、我々の作戦通り、名刺や、筆跡、人相、等に混乱を生じ、犯人を絞ることが不可能になったのであります。その上、特異な凶器による犯行を、軍の特殊部隊としたことにより、ＧＨＱの介入を許し、捜査を複雑にするとともに、その知己、友人といった、罪を犯してもすぐに疑われることのない人間まで、捜査の手を広げ

ることができなかったのであります」

五十年間の鬱積を晴らすために、祖父は走っていた。

「その二　私は召集され、軍医として第三陸軍病院にて服務中、陸軍の特殊部隊に所属していたBの、担当医となり、特殊部隊の実態と、毒物による生体反応の研究について、興味深い実験結果を聴取しました。Bは戦後すぐに心臓病にて死亡しましたが、私は開業し、嘱託医を兼務するなどして何とか食いつないぎ、次の飛躍の時を待ち望んでいました。そんなとき保健所に送り込まれる野犬や野猫の処理法について相談され、Bの研究レポートによる生体実験の機会を得たのであります。これが事件の凶器、青酸化合物による殺人計画であります」

「その三　警察当局は防疫班による予防薬投与という名目にとらわれ、犯人を防疫関係者と的を絞って捜査を始め、内部の結束を乱し、GHQの監視下、焦り出し、当局の面目の為にも防疫関係者以外から、何とか犯人をあげなければならない破目に陥ったものと思われます。私は逃げも隠れもいたしませんでした。灯台もと暗しとは言え、当時所轄本署の嘱託医としてその渦中にあったのであります。私は如何なる疑いも、調査も受けることはありませんでした。捜査の段落するのを医院で医療に専念しながら、待ち望んでいたのであります。ここに、幾つかの証拠品を……」

思わずわたしはボイスレコーダーのスイッチを切った。

「お祖父さま、まだ、証拠品があるんですか？　ないのにあるなんて言ってはいけませんよ」
わたしは押しつけられている恐怖の刃を避けて、横に体を移すように言った。
「ああ、持っていますぞ。この日のために保存しておいたんだ。証拠がなければ、こんな自白など、狂人のたわごとにしかならないさ！」
運命は変ろうとしている、その分岐点に立っているのは祖父だけではないのだ。大衆の非難轟々のなかに、瀬波家一族は晒され、孤立するのだ。父や母や、叔母一家、そして孫であるわたし……。
「その四　当局は遂に、強盗及び大量虐殺犯たる私を逮捕出来なかったばかりか、無実の一市民を、単なる当局の面目のために、脅迫して自白に追い込み、アリバイを無視し、証拠もないまま、五十年にわたって投獄し、常に死刑の恐怖に晒し、その家庭を崩壊させたのであります。私は司法当局に対し、天道亮太氏の無実を認め、速やかに釈放する手続をとられるよう要求致します。
私は無能な検察当局に対し、ここに於いて、勝利宣言をするものであります。遂に私は勝ちました。何人といえども、私を逮捕することも、処罰することも出来ません。私はここに真実を告白し、証拠をお目に掛ける次第であります」
桂馬の自白が終わった。
「あまりにも一面的だわ。死者へのいたわりも、殺人の必然性もない」

わたしは抗議の声をあげた。
「名前は？　ご自分のお名前は？　ここにきてまで、名乗らないのですか？」
「名前を自白すると言った覚えはないぞ！」
わたしはその瞬間、祖父を捨てた。祖父なしで生きていける、唐突にそう思った。いずれにしても、どこかで祖父が終わり、どこかでわたしが終わる。だけど一寸待って！
「お祖父さま、共犯者は生きているの？　生きているんなら、教えて下さい」
「一人はKは祖国に帰っていまはいない。共犯は盗みに於いてであって、殺人は全く犯してはいないのだ。小切手を換金した彼は、Kに依頼され、犯罪の認識がもしかしたらなかったかもしれない。五十年の月日が流れた。その後の消息は聞いていない」
「そっとしておくのね」
そっとしておけるかどうか？
「あとは証拠を……」
「一つは指紋だ。紙と墨を持って来てくれ。誰とも合致しなかった、指紋がある筈だ。二つめは頬の傷跡。もう一つはBの青酸化合物による生体実験レポート」
「そのレポートは本当に存在するんですか？」

祖父は黙っている。これから、どんな展開が来るとしてもわたしは、それを、この眼でしっかりと見ていなければならない。とにかく、ここまでこぎつけたのだ。完璧とは言えないけれど……。

わたしは用意して置いた四個の小さなカセットテープに同じ自白の言葉を入れ終えた。同時に三つの主要新聞社に送付するのだ。一つは哲に送る。

あとはテープに添える手紙。

お願い！

同封のカセットテープは、昭和二十二年十月十日、海浜銀行M支店における強盗殺人事件の真犯人が、事件の真相を自白したものであります。

どうぞ、貴社におかれましては、お聴き取り下さいました上、他二社とあわせて十月五日に公表されますよう要請するものであります。

わたしはここまでパソコンに打ち込んで、階段を駆け降り、杉子を呼んだ。一寸した隙に、杉子が二階に上がって来たりしたら大変、階段の下で何度も何度も杉子を呼んでいた。十度目、誰も出て来ないということは、不在なのだ。よかったわ。彼女は誕生日を警戒している筈だ。盗聴されていなかったのだ。そうだろうか、父や叔母なら、部屋に戻るとわたしは盗聴器さがしにかかる。何処からも

それらしいものは現れなかった。
恐怖はなんの意味もないのよ、役にたちはしない、勇気を出せ。何の為に？　それがだんだんわからなくなる。
「お祖父さま、証拠品ってまだあるんですか？　証拠についても書いておきたいの。だって、それがころんと出て来ても、何なのか見当がつかないと思うんだけど……」
「読まなくとも解る。何も書く必要はない」
今頃になって心変わりされても……。祖父は後悔しているのだ……わたしは決めたのよ、もう、後には引けない。
「証拠というのは、毒薬の壜とか、ピペットやピンセットを入れてあった、軍隊用の医療ケースや、犯人が履いていたと言う茶色の長靴や、お祖父さまのいう、その実験レポートかしら？　ああ、そうかってすぐわかるものでないと？」
証拠だと言って入れたものが、自白を覆す役割を果たすものだったらどうしよう。わたしにはそれを判定する力なんか、多分ない。
「手紙にはお祖父さま、サインして下さるわね」
桂馬は紫色の煙を吐き出していて、返事をしない。祖父にとってもこの一線を越えるには大変なエ

ネルギーがいるのだ。
傍観しているわたしとは違う。テープに事件の真相を語り、誇らしげに昂揚していた祖父はもういない。額に深い皺をきざみながら、よろよろと立ち上がった。
「おまえは、私がいままで、のうのうと生きて来たとでも思っているのかね。……毎日毎日逃げてきた。逃げ通しだった。時効になったからって、救われたわけじゃない。……怖いよ。今だって、本当は怖いのだ。私はあれ以来、ゆっくり寝たこともない。呼吸ひとつまともに出来たこともない。それなのにお前は、自白しろと言い続けた。お前にそれがわかるか。……自白したからといって、世間の人は私を許すのか？　お前だって私を許していないじゃないか。その証拠に、さっき、自白を聞いていて、死者に対する畏れがないの、殺す必然性がないのと、勝手なことばかり言った」
わたしは桂馬のそばから、横へ体をずらそうとした。彼の手がわたしの肩を掴んで揺さぶった。そのまま揺さぶられていた。わたしの体の管のなかで、液体がごぼごぼ音をたてる。わたしには長い長い時間が待っているのに、祖父にはもういくばくも時間が残っていないのだ。
「証拠品は？」
わたしはそれが知りたい。光線の具合だろうか、祖父の目の色が変色した。
「ないのね、ないんだわ。だったら、共犯者Kは祖国に逃げたとして、Mってどんな人物？　自白が

二人なら、お祖父さまの自白は何倍か強くなるわ」
わたしの目の前が黄色くなった。吐き気がした。桂馬の手が肩からわたしの首筋に添って這い上がってくるのがわかった。跳ね除けようとしても身体が動かない。祖父の狂気の目がわたしの瞳を覗き込んでいた。
「Mというのは、真岡学だ……」
哲の大伯父！
祖父の手の指がわたしの首に巻きついていた。肩が山のように盛り上がる。
「お前は何にもわかっていない。そんな自白や証拠が、今更何になるんだ。本当の自白はこれしかないんだ」
殺人鬼！　わたしはそれをどうして忘れていたんだろう。目の前が暗くなった。わたしの耳が最期の音を拾おうとしている。
「チッチッチッ」
祖父の食いしばった歯の裏側を舌先が小刻みに叩いていた。

エピローグ

「気がついたか！」

眩しい光のなか、哲の顔がゆらゆら揺らめきながら流れていた。大きく伸びたり、歪んだり、縮んだり、引っくり返ったりする。哲はどうしてじっとしていないのだろう。

わたしは眼を閉じた。夢を見ているのだ、多分、最期の夢を！

チッチッチッ、祖父の舌先が動く。力ならわたしの方がある筈なのに、力を入れようにも、どんな力も出て来ない。

わたしの手が暖かい手で力強く握られていた。

「理子！　何だか心配になって、飛んで来たんだよ。間に合ってよかった！」

哲の顔が動きをとめた。わたしは生きていたのだ！

「お祖父さまは？」
哲が首を傾げるのが見えた。
突然テレビのアナウンサーの声が大きくなった。誰かが、テレビのスイッチを入れたのだ。

「……昭和二十二年十月十日、日本国中を震撼させました、海浜銀行強盗殺人事件の死刑囚、天道亮太が、本日午後二時三十分、老衰のため、刑務所に於いて死去致しました。往年九十歳……
臨時ニュースを申しあげます。昭和二十二年十月十日、日本国中を震撼させました、海浜銀行強盗殺人事件の死刑囚、天道亮太が本日死去致しました。往年九十歳でした、天道亮太死刑囚は、本日午後二時三十分、老衰のため死去致しました。往年九十歳でした。
天道亮太が死去致しました。天道亮太が死去致しました。天道亮太が死去致しました。死刑囚が、死刑囚が、死刑囚が、死刑囚が……」
アナウンサーの声が震えている。わたしが震えているのだ。
「獄中生活五十年……獄中生活五十年間……無実を叫び続けながら……無実を叫び続けながら、無実を叫び続けながら……無実を叫び続けながら……。死刑囚　天道亮太が死去致しました。ここに哀悼の意を表し、……」

完